

平成二十二年五月二十九日

「東京 de 寺子屋」(第三十四回)

# 「歴史・古典・偉人伝に学ぶ意義とは」

(株)寺子屋モデル 代表世話役 山口 秀範

## 一、縦のつながり (短歌の世界)

父母が頭ちらはかき撫かしらで幸なくあれさていひし言葉けとばぜ忘れききもりかねつる (万葉集防人の歌)

春風の花を散らすとみる夢は覚めても胸のきはぐなりけり (西行)

敷島のやまごころを人とはば朝日にはほふ山ざくら花 (本居宣長)

山桜花もろともに散り果てしみ祖のいのちなつかしきかな (吉田房雄)

天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出し月かも (阿倍仲麻呂)

けふもまた知られぬ露のいのちもて千歳を照らす月を見るかな (久坂玄瑞)

## 二、横の価値観共有 (古典も昔は現代文)

\* 「論語」(学而一・四)

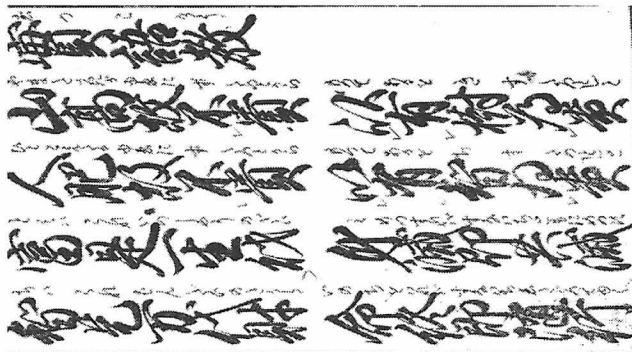
曾子曰、吾日三省吾身、

為人謀而不忠乎、

与朋友交而不信乎、

伝不習乎。

\* 「寺子屋」の教科書



山高たかきが故ゆゑに貴たかからず、樹あるを以て貴しとす。人肥こたるが故ゆゑに貴たかからず、智あるを以て貴しとす。富は是一生の財、身滅ほろぶれば即共に滅ぶ。智は是万代の財、命終はるとも即随したがひて行はる。(実語教)

## 三、志をみがく (学ぶは真似ぶ)

\* 「士規七則」吉田松陰 (獄中より甥の元服を祝って)

約して三端と為す。曰く「志を立てて以て万事の源と為す。交を扱びて以て仁義の行を輔く。書を読み以て聖賢の訓を稽ふ」と

\* 「啓発録」 橋本佐内 (数え年十五歳の作)

- 一、 稚心を去る . . . 果菜の類のいまだ熟せざるをも稚といふ
- 二、 気を振るう . . . 恥辱のことを無念に思ふ処より起る意気張りの事
- 三、 志を立てる . . . 志と申すは平生安楽無事に致し居り心のたるみ候  
時に立事なし
- 四、 学を勉む . . . 学とは総てよき人すぐれたる人を跡付して習ひ参  
るをいふ
- 五、 交友を扱ふ . . . 益友と申は兎角氣遣な物にて折々不面白事有之候  
性質疎直にして柔慢なる故遂に進学の期なき様に存じ、  
毎夜臥衾中にて涕泗にむせび . . .

\* 故郷 (作詞 高野辰之・作曲 岡野真一)

兎追いし	かの山	如何に在ます	父母	志を	はたして
小鮒釣りし	かの川	恙なしや	友がき	いつの日にか	帰らん
夢は今も	めぐりて	雨に風に	つけても	山は青き	故郷
忘れがたき	故郷	思い出ずる	故郷	水は清き	故郷

四、 生き方の手本に (偉人の姿は言葉に留まる)

\* 「入江杉蔵を送る敍」 吉田松陰

杉蔵往け。月白く風清し、飄然馬に上りて、三百程十数日、酒も飲むべし、詩も賦すべし。今日の事誠に急なり。然れども天下は大物なり、一朝奮激の能く動かす所に非ず、其れ唯だ積誠之れを動かし、然る後動くあるのみ。